

み と じょう おおてもん りょうがわ ちょうおおがた かわらべい
水戸城 大手門の両側にそびえる超大型の瓦塼。

ぜんよう あき
その全容が明らかになりました。



徳川ミュージアム所蔵 ©徳川ミュージアム
・イメージアーカイブ/DNPartcom

み と じょう あとだい じ は っ く つ ち ょ う さ おおてもんあと
水戸城跡第63次発掘調査(大手門跡)

げん ち けん が く かい し り ょ う
現地見学会資料

<p>み と じょう お お て も ん あ と は っ く つ ち ょ う さ</p> <h2>水戸城大手門跡の発掘調査</h2>	
<p>調査名称：水戸城跡第63次発掘調査</p>	
<p>調査地：茨城県水戸市三の丸2丁目</p>	
<p>調査期間：平成29年11月4日～平成30年1月下旬(予定)</p>	
<p>調査面積：約52㎡</p>	
<p>調査主体：水戸市教育委員会(歴史文化財課埋蔵文化財センター)</p>	

1 水戸城とは？

水戸城は、水戸藩35万石の居城です。東から「下の丸」「本丸」「二の丸」「三の丸」の4つの区画に分かれていました(図1)。最も重要な区画が二の丸で、お城のシンボル「天守閣(三階櫓)」、殿様が政治をした「御殿」、大日本史を編集していた「水戸彰考館」、そしてお城の正門である「大手門」が建っていました(図2)。



図1 水戸城の区画(正保国絵図を改変)

これらの建物は明治以後に失われてしまったため、市では現在、大手門などの歴史的建造物を当時の姿に復元する「明治維新150年記念 水戸城大手門復元整備事業」を進めています。



図2 二の丸の建物(水戸市立博物館所蔵模型)

2 なぜ発掘をしているの？

「復元」とは、できるだけ当時のままの形や寸法で再現することをいいます。一方、大手門の両側にある土塁は、明治時代に埋められて膨らんでいるため、そのままでは大手門を復元できません(図3)。そのため、発掘調査を行いながら、明治時代の土を取り除き、江戸時代の土塁の一部をあらわす作業をしているのです。

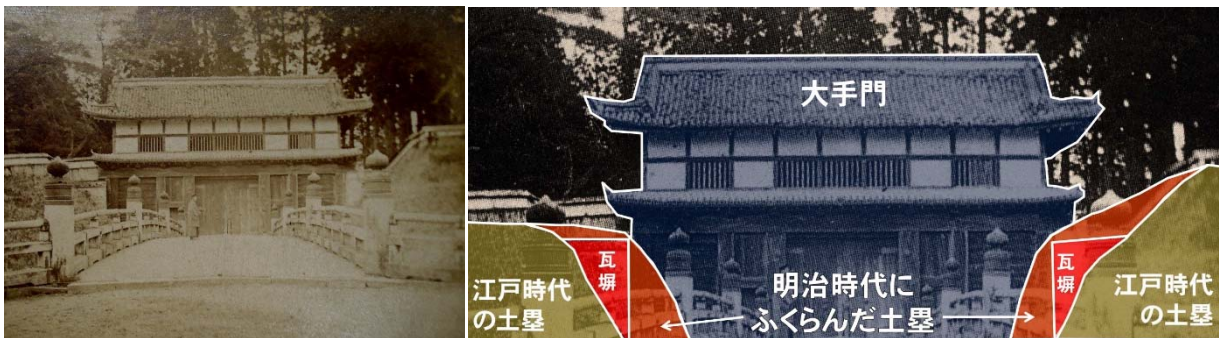


図3 水戸城大手門古写真(左)と、土塁の構造模式図(右)

3 どんな発見があったの？

① 超大型の瓦塼をすべて発見しました

【2年前に瓦塼を二つ発見】 大手門の発掘調査は、これまで6回行われていますが、4回目（平成27年度）の発掘調査で、大手門の北側で超大型の「瓦塼」が二つ発見されました（図4）。

瓦塼とは、瓦と粘土とを交互に薄く積み上げて作った塼のことで、練塼ともいいます。水戸城大手門の瓦塼は、復元すると高さ約5m、厚さ約2.5mにもなる巨大なもので、日本最大級の規模です。



図4 北側の瓦塼

【今回、瓦塼をすべて発見】 この北側の瓦塼と同じものが、南側にもある可能性が高いということは、5回目（平成28年度）の発掘調査で判明していました。そして今回の調査で、ついに南側で二つの瓦塼が見つかりました。新発見の瓦塼は上のほうは崩れているものの、根元の部分は残りが良く、どっしりとした重厚感のある作りをしていることが分かります（図5）。瓦も丁寧に重ねられ、たいへんな手間をかけて作り上げた、水戸徳川家にふさわしい見事な塼といえます。

今回の発見で、大手門の両脇にそびえる四つの瓦塼がすべて発見されたことになります（図6）。城門の脇に四つの瓦塼が付属する例は、水戸城以外は発見されていないため、全国的にも貴重です。

【大火灾の復興にあわせて建設か】 瓦塼の建設時期は、瓦の製作年代などから、江戸時代の中ころ（18世紀の中ころ）と考えられます。

実はこの時期、水戸城で最大の火事があり（明和元[1764]年）、天守閣も焼けてしまいました。大火灾の復興のためには、大量の瓦が必要です。

四つの瓦塼は、こうした大火灾の復興に使用された瓦を使って、建設された可能性ががあります。



図5 南側の瓦塼



図6 大手門と四つの瓦塼の位置

② 目に見えないけれども大切な施設「石組水路」を発見しました

瓦堀の下からは、石組水路が、ほぼ完全な状態で発見されました。大手門や土塁から流れる水をしっかり集めないで、柱が腐るなど壊れやすくなるため、水を外に流すしくみを作るのはとても大切なことでした。

大手門では、光圀が作った笠原水道と同じ、水に強い石（神崎岩といいます）を組み合わせ、水を集める枡と、それを流す地下水路を作っていました（図7）。

大手門や瓦堀といった目に見える建物だけでなく、目には見えないけれども重要な雨水の処理問題にも、しっかりと気を配っていた証拠といえます。



図7 石組水路

③ 鯨瓦・鉄砲玉などさまざまな遺物を発見しました

【鯨瓦】発掘調査で出土したたくさんの瓦の中には、三つ葉葵紋の瓦や鬼瓦などがありますが、中でも重要なのが、鯨瓦の破片が発見されたことです（図8）。

大手門の鯨は、古絵図に描かれている一方、古写真には写っていませんでした。今回、その実物が発見され、大手門に鯨が載っていたことが確定しました。

【鉄砲玉と鋳型】鉄砲玉とその鋳型（鉄砲玉を作る道具）も興味深い発見です（図9）。明治元(1868)年、水戸藩では天狗派と諸生派が、弘道館と大手門にそれぞれ陣取り、「弘道館の戦い」という戦争が行われました。出土した鉄砲玉と鋳型は、こうした150年前の水戸藩の悲しい歴史を物語る物証といえるでしょう。



図8 鯨瓦



図9 鉄砲玉

4 瓦堀や出土品はこれからどうなるの？

瓦堀や石組水路など動かすことができないものは、できる限りそのままの状態で見守り保存して、未来につなげることが大切です。そのため、遺構を記録した後に埋め戻し、将来の世代に伝えます。出土品は、埋蔵文化財センターで保管します。発掘の成果は、発掘調査報告会や企画展示を開催したり、報告書を刊行したりして、公開していきます。

なお復元整備では、発掘した瓦堀を覆う形で、新たに瓦堀を復元していきます（図10）。大手門の復元とともに、ぜひご期待下さい。



図10 大手門と瓦堀の復元イメージ